



働いている人の「第二の勤務」を、ご存知ですか？
アメリカのアーリー・ホックシールドという家族社会学の専門家が、共働きの人たちの家事や育児を「セカンド・シフト(第二の勤務)」というタイトルで出版した本があります。一九九〇年に初版が出版されていますが、その当時のアメリカ社会の共稼ぎ世帯の実態が現在の日本にそのままあてはめられ興味深い本です。この本は、女性サイド

ジーアンドエス社長 萩原 扶未子

働く人の「第二の勤務」

に立った第二の勤務の「農藤」が書かれています。私はもう少し違った角度で見なければ、これからの社会は成り立っていかなくなっていると感じます。

昨今、少子化が深刻な問題になり、また離婚率も未婚率も増加していますが、

女は仕事と家庭に移行し、核家族化が追い打ちをかけ「男女とも仕事と家庭」という新たな役割が成立してきました。もちろん残念ながら、まだまだ男

は仕事、女は仕事と家庭」を基にした職場や家庭が多いのが事実です。そうなら

疲れて帰ってきているのに、「夜の勤務」である家事・育児をこなして、倒れこむように眠りにつく生活……。

仕事も家事も育児も、疲れたとか、他の事が忙しいからといって、休むわけにはいきません。仕事・家事

がほしい」と冗談とほ取れない会話が交わされるのではないのでしょうか。

一人の収入では生活が難しく、将来の不安もあり働きに出なければならぬ女性と、自己の生きがいのために働きたい女性が、有職率をさらに上げていきます。第一線で働く人でも第二の勤務(家庭・育児・介護)をもつのが当たり前になってきます。

さらに少子化対策や介護問題も深刻な状況になっていきます。

職場も家庭ももちろん行政や地域も含め、今の時代にあつた環境作りをしなければ、皆、第一と第二の勤務で疲れきってしまいます。

「第二の勤務」が要因として大きな部分を占めていると言えます。

職場と家庭は、長い間男は仕事、女は家庭」という役割分業の中で、環境と文化ができてきた。そこに女性の有職率の高まりとともに「男は仕事、

女は仕事と家庭」に移行していき、核家族化が追い打ちをかけ「男女とも仕事と家庭」という新たな役割が成立してきました。もちろん残念ながら、まだまだ男

てくると、朝は早くから起きて、「朝の勤務」としての家事・育児をこなし、「次の勤務」の職場に出かける。不景気とIT化で激変する社会情勢で仕事量は増え、

気の休まる暇もなく、帰宅時間を気にしながら仕事をし、大急ぎで帰宅。今度は

・育児をバランスよくこなすことは難しく、どれかは犠牲になってしまっている人がほとんどでしょう。働く女性が「奥さんがほしい」と言う声をよく耳にします。共稼ぎや未婚率が増えていき、近い将来、男性も妻とは別の意味で「奥さん

職場も家庭ももちろん行政や地域も含め、今の時代にあつた環境作りをしなければ、皆、第一と第二の勤務で疲れきってしまいます。

・育児をバランスよくこなすことは難しく、どれかは犠牲になってしまっている人がほとんどでしょう。働く女性が「奥さんがほしい」と言う声をよく耳にします。共稼ぎや未婚率が増えていき、近い将来、男性も妻とは別の意味で「奥さん

職場も家庭ももちろん行政や地域も含め、今の時代にあつた環境作りをしなければ、皆、第一と第二の勤務で疲れきってしまいます。